鯉〈こい〉と長者〈ちょうじゃ〉（滝野町高岡）

「バシャ、バシャ。」ものすごい水音がしました。高岡〈たかおか〉村の長者〈ちょうじゃ〉やしきのすぐ前、天下溝〈てんかみぞ〉のあたりです。ひるねからさめた下男〈げなん〉が、だるそうな目でふとみぞをのぞいてみますと、大きな鯉〈こい〉が背〈せ〉びれを水から出して、くるしそうにもがいていました。

「鯉や、大鯉がいるぞー。」

下男は大ごえでみなをよびたてました。納屋〈なや〉から、酒蔵〈さかぐら〉のかげから、大ぜいの男たちが網〈あみ〉やかごをもってとび出してきました。男たちは、かみとしもてにわかれて、この大鯉を追いたてましたが、鯉は水をとばし、足のあいだをすりぬけ、人の顔をうつなどして必死〈ひっし〉ににげまわりました。やっとのことで、徳平〈とくへい〉という下男が体ごと組みつきつかまえてみますと、一～二メートルにもあまる化物〈ばけもの〉のような鯉でした。

「平池〈ひらいけ〉のぬしやで。たたるかもしれへん。放してやろやないか。」

などという者もいましたが、みなは晩のごちそうにすることにきめてしまいました。長者も出てきてさんせいしました。三枚におろし、あらいにしますと、何と四十人分もとれました。さすがに人数の多い長者やしきでも食べきれなかったので、近くの親せきへもくばり、おおいに舌〈した〉つづみを打ったのです。

その年の冬、長者やしきで作りかけていた酒が、ぜんぶ、どうしたことかくさってしまいました。そして、つぎの年の春、下男の徳平がぽっくり死にました。その夏は日照りがはげしく、水によわい高岡村は一つぶの米もとれませんでした。長者やしきの酒作りの失敗は、そのつぎの年も、またそのつぎの年も続きました。こうして、長者はすっかりびんぼうになってしまいました。

村びとたちは、鯉のたたりであるとうわさしあったそうです。